

# 私の宝物

岡本 庄三郎

私の宝物というのは一冊の古ぼけた詩集である。それも、有名編者の署名入りであるとか、世にも珍しい希覯本であるとかいうたぐいのものではなく、普通ならとくに古新聞や古雑誌と共に処分されていたであろうと思われるささやかな本である。話は私の旧制中学四年か五年のころにさかのぼる。夏休みに例年補習授業が希望者に開講された。この本はその時の担当の英語の先生が使用されたテキストで、本のタイトルは *One Hundred and One Famous Poems, The Cable Company, Chicago 1929* とあり、編者は *Roy J. Cook* となっている新書版ぐらいの大きさの本で一八六ページから成っている。補習に詩集が使われること自体が珍しく、その上、洋書を手にするのは初めてであったから、私は非常に新鮮な印象を受け、なにか心の高ぶりすら感じたくらいであった。この詩集の中にいまも心に残っている詩が一篇あ

る。“The Wishing Bridge” という詩で作者は *J. G. Whittier (1807-92)* というアメリカの詩人である。辞典には、マサチューセッツ州の貧農の生まれで、敬虔なクエーカー教徒とある。同詩集には彼の短詩三篇が収められていて、これはその中の一つである。日本語では「願かけ橋」とでも訳してよいだろうか。非常に易しい詩なので当時でもよめば大體理解できた。ある海辺に近い山地に昔からこのように呼ばれている橋があった。この橋の上でだれでも、真剣に純真な気持ちで願いをすれば、いつか必ず叶えてもらえるという伝説があった。ある日、ふたりの女生徒が希望に胸をふくらませてこの橋の上にやってきて、ひとりとは将来一国の女王となりその領地を治めたいと願い、もうひとりとは世界旅行をして見聞を広めたいと望み、それぞれ願いをかけた。それから幾年月が過ぎ、様々な喜びや悲しみを経験して、ふたりは共に中年を過ぎ、頭に白髪も目立つ年ごろとなってこの同じ橋の上で再会することになった。過ぎし記憶をたどりながら、ふたりはお互いの身の上を語り合った。ひとりは貧しい農夫の妻となったが、農場はいま彼女の領地で、宝冠や玉座はないけれども女王のようにそれを支配

し、愛情と忍耐をもって務めを果たしているという。もうひとりは、未知の世界は依然として彼女の前に横たわっているけれども自分は愛情と義務の境界を踏み越えたことはなく、見たり聞いたりするものはありふれたものばかりだが、未亡人の母の看病をしながら過す病室は自分の領域として十分であるという。楽しい旅行記を母に読んで聞かせ、互に手を取り合って空想の世界に遊び、母が眠りにつけば、本は忽ち魔法の鏡となり、自分は寝ずの番をしながら夢の中で世界を駆け巡ることができた。結局、ふたりの願は、現実的には違った形ではあるけれども、実質的には叶えられたことになったわけだ、昔からの伝説は真実であり、神はふたりに対して、最も良い方法でその願いを聞き入れてくださったのだから、その神意に対して感謝の祈りを捧げたのであった。

この種の言い伝えはなんらかの形で遍く存在する普遍的なものである。感謝の祈りは我々の生活の基本的なものであり、機械文明、物質文明が色濃く我々の生活に影響を及ぼしがちな今日、この素朴な一篇の詩が、それ故にこそ、私の心に残る。

(おかもと しょうざぶろう 文学部教授)